

中学生の部

最優秀賞

ソウルの街で

常総学院中学校

染谷 春花

私は、七月二十五日から行われる英語のデイベート大会に参加するため、韓国のソウルに行った。姉も一緒に参加した。私は、飛行機の中で、韓国ってどんな国なのかと、Kポップ音楽を聴きながら、期待に胸を膨らませた。ソウルには、夕方到着した。夕飯は各自で食べることになった。初めて見るソウルの街は東京とよく似ていた。歩いている人たちも日本人と似ていた。違うところは屋台がとても多かったことだ。ホテルの前の通りには、屋台が道いっぱい軒を連ねていて、食

べ歩きをしている人が大勢いた。私と姉は、おいしい夕食が食べられるレストランを探しに外に出た。午後七時の街は、まだ少し明るく、タバコを吸っている人もいたし、バスを待っている人もいた。それから、夢中で姉と歩き回っているうちに、道に迷っていることに気づいた。レストラン探しがホテル探しになっていった。私たちが、泊まる予定のホテルが見つからない。もと来た道に戻ろうとしても、目印をすっかり確認していなかった私たちは、道に迷ってしまったのだ。看板を見ても、韓国語で書かれていて、何が書いてあるのか全く分からない。東京と似ていると思っていた街が、全く違う国に見えた。不安と恐怖で、早くも、もう日本に帰りたくなった。そうこうしているうちに、急に雨が降り出した。雨は、どんどん勢いを増していき、私たちは、あつという間に服も髪もびしょ濡れになってしまった。ゲリラ豪雨だ。傘を持っていないかった私たちは、小さなシオルダーバツ

グを頭にのせて、道行く人にホテルの場所を聞いた。しかし、聞いてもよく分からなかった。どうしよう、どうしよう。道の角を曲がると、女の人が建物の下で、雨が止むのを待っていた。私と姉は勇気を出して、彼女にホテルの名前を言って、場所を知っているかと英語で聞いた。すると、彼女は、「ちよつと待ってて」と言い、彼女の近くの車に乗っている人に何か話しかけ、戻ってきた。彼女は、雨が止むのを待っていたわけではなく、友達を待っていたのだ。数秒後、車に乗っていた彼女の友達が車から降りて来て、あまり流暢りゅうちやうではない日本語で「ついてきて」と言ってくれた。彼らは、私たちと一緒に歩いてホテルを探してくれた。やっとホテルが見つかった時、私たちが何度もお礼を言うと、気にするなと言う感じで、首を振った。私は、彼らが全身ずぶ濡れになってしまっていることに気がついた。本当に申し訳ないなという気持ちでいっぱいになった。そして、何て親切なのだろうと感

謝の気持ちでいっぱいになった。韓国一日目、私たちは、ゲリラ豪雨のソウルの街でドキドキの冒険をし、親切な人たちに会い、韓国が好きになった。

次の日のデイベート大会では、日本以外にケニヤ、オーストラリア、インドネシア、アメリカ、韓国など様々な国の中高生が参加していた。皆、日本人の私よりもずっと大人っぽい気がした。デイベートは、三人チームで行い、お題が出されて賛成意見と反対意見に分かれる。チームごとの打ち合わせの時間がもうすぐ終わる時、ジャッジ（審判）の人が、私たちにどこの国から来たのか聞いてきた。「ジャパン」と答えると、対戦する相手国の人たちに拍手されてしまったのだ。彼らは、ガッツポーズをして、ラッキーという顔をした。日本人というと、こんなにも余裕を持たれてしまうのかと悔しかった。だが、彼らの英語はやっぱり流暢で、彼らの思いは、しっかりと伝わってきた。自信満々の対戦相手の前で

意見を言う時、緊張のあまり声が震えてしまった。私たちも必死に意見を述べたが、結局、負けてしまった。自分の英語が、世界では通用しないことを痛感した。

帰りのバスでガイドさんが、「韓国は日本によって占領されていたが、頑張って立ち直ってこんなに立派な国になりました」と話した。彼は、怒っているような顔ではなかったが、声は少し怒っているようだった。私は、日本人と似ていて、親切で優しいと思っていた韓国の人にこんな気持ちがあったことに驚いた。学校の授業で、日本が、韓国を長い間、植民地としていたことは勉強したが、実際に韓国の方に言われると、歴史的な事実にも重みを感じた。日本が行ったことは、恨みとして何世代も引き継がれているのだと思った。私は、昨日、雨の中で一緒に歩きまわってホテルを見つけてくれた彼らを思い出した。彼らの日本観と年配の方の日本観は、違うのかもしれないと思った。過去の事実は、消せないけれど、

これから私たちは、お互いを思いあって、新しい歴史を作っていけたらいいと強く思った。

私は、今回、初めて日本を出て、外側から日本を見たことで、普段意識しない「日本人としての自分」を感じた。羽田空港に到着した時、私は、出発の時より日本人の顔をして、飛行機から降りた、と思う。

(茨城県つくば市)